

幼児における歯列および 口呼吸調査

こいし歯科

* 下平尾 知波
笹岡 志帆





目的

近年、歯列不正を主訴とする幼児来院者が多く、さらに幼児患者における口呼吸、またはその疑いがある患者も多いと感じている。
そこで幼児における歯列および口呼吸の状況を調べることにした。





対象

兵庫県宝塚市の某幼稚園児419名（3歳から6歳）



〈参考：ホームページより〉

- ✦ 兵庫県宝塚市 私立幼稚園
- ✦ 周辺：住宅街
- ✦ 園児人数：200人

- ✦ 給食制度
週2日給食
 米飯給食1日
 パン給食1日
週2日弁当
 ※残り1日は午前中のみ



方法

平成24年度および平成25年度の歯科検診時に
歯列の状態および口呼吸の有無について調べた。
歯列の状態と口呼吸の分類は、以下のように分類した。
Mann-Whitney検定は、SPSS Statistics 17.0 によって分析した。

〈歯列分類〉

スペース無し：霊長空隙および成長空隙が認められない

過蓋咬合：上顎前歯が下顎前歯を3分の2以上被蓋する

交差咬合：歯列の一部のかみ合わせが交差している

開口：臼歯での咬合の際に前歯がかみ合わない

反対咬合：3歯以上の被蓋が逆になっている

異常なし：その他の異常が見られない

〈口呼吸の疑いがある者の基準〉：以下のうち1つ以上認める者

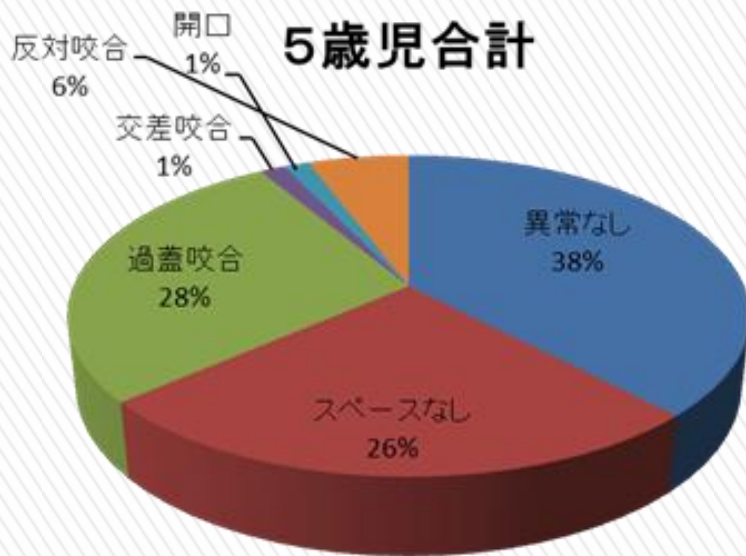
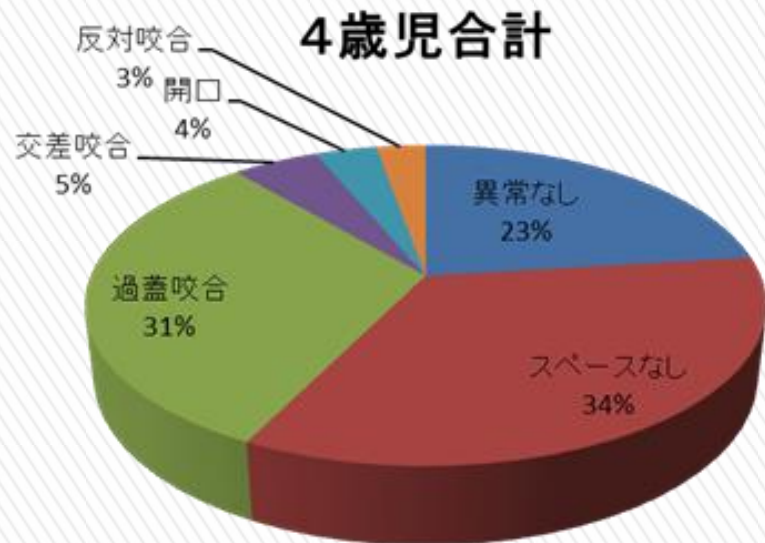
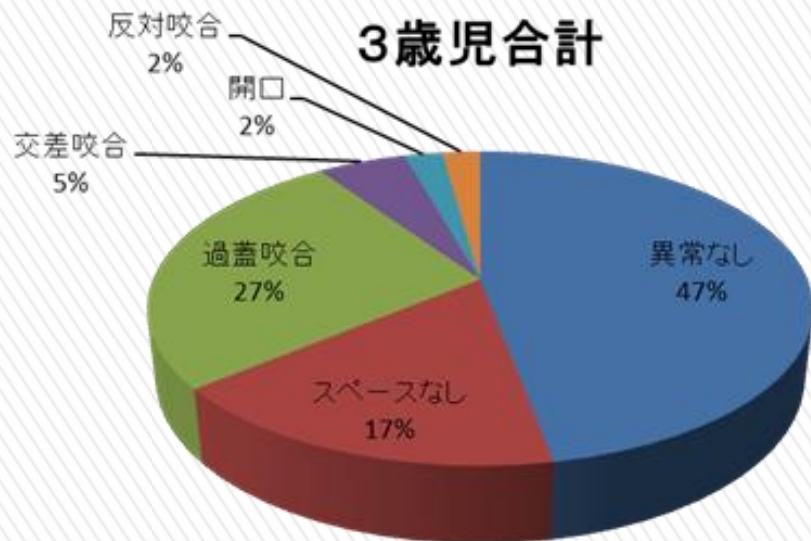
安静時の口唇が開いている

口唇の乾燥を認める

前歯部のみに色素の沈着を認める



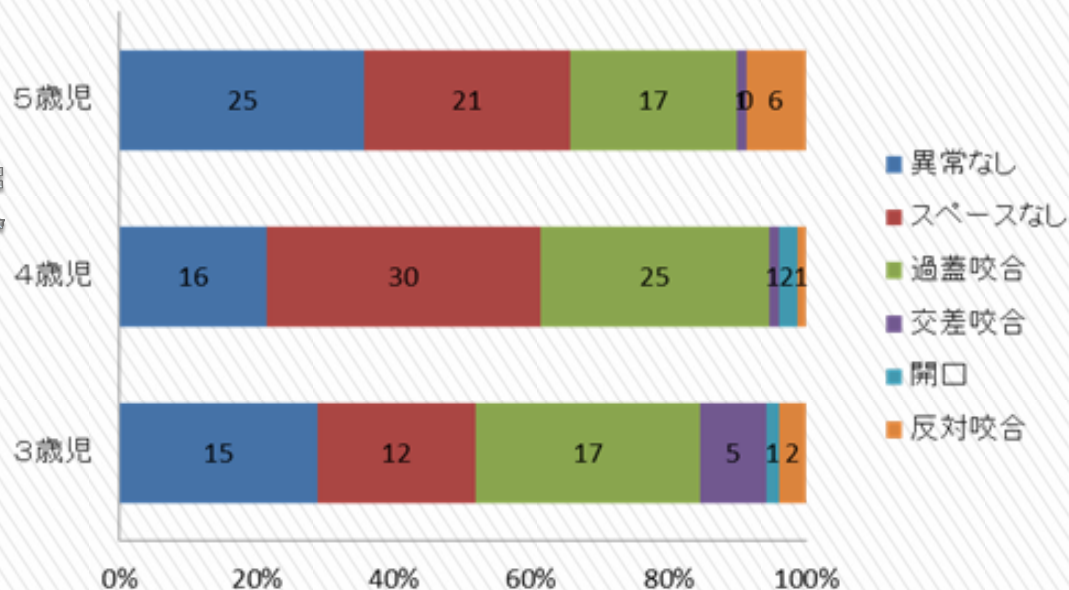
結果1-① 学年と不正咬合の割合



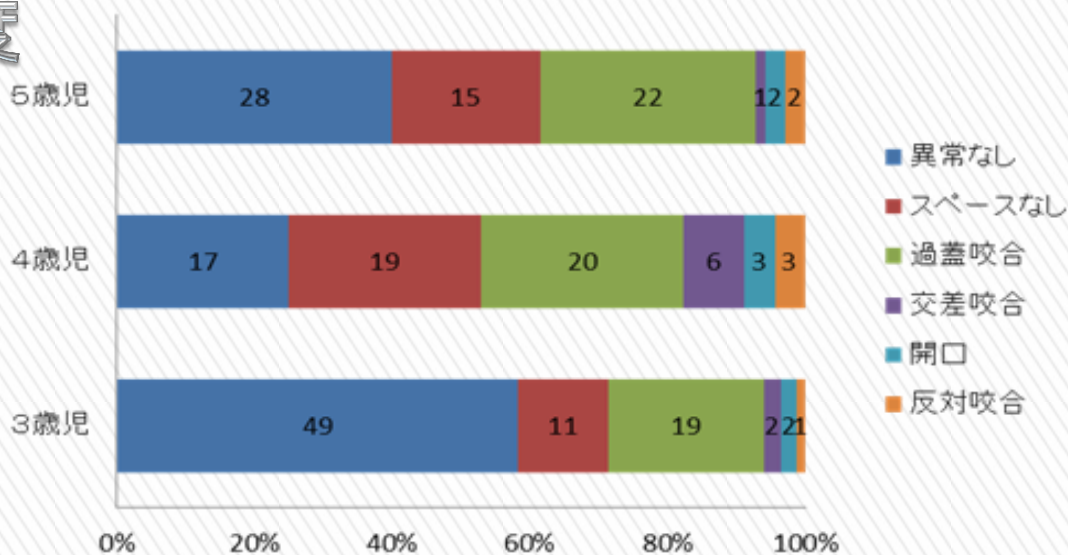


結果1-② 年度別 不正咬合の割合

平成24年度



平成25年度

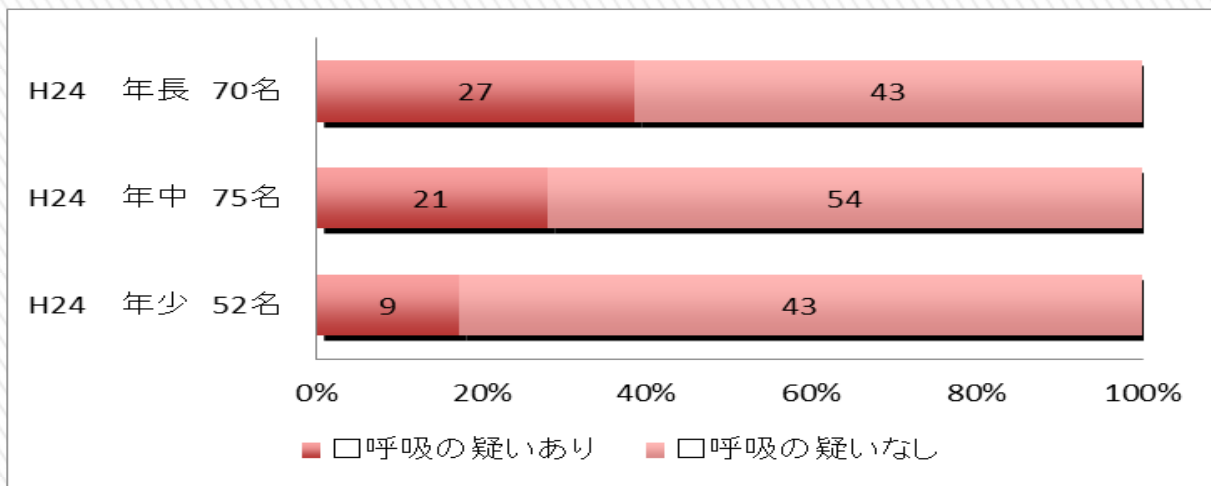




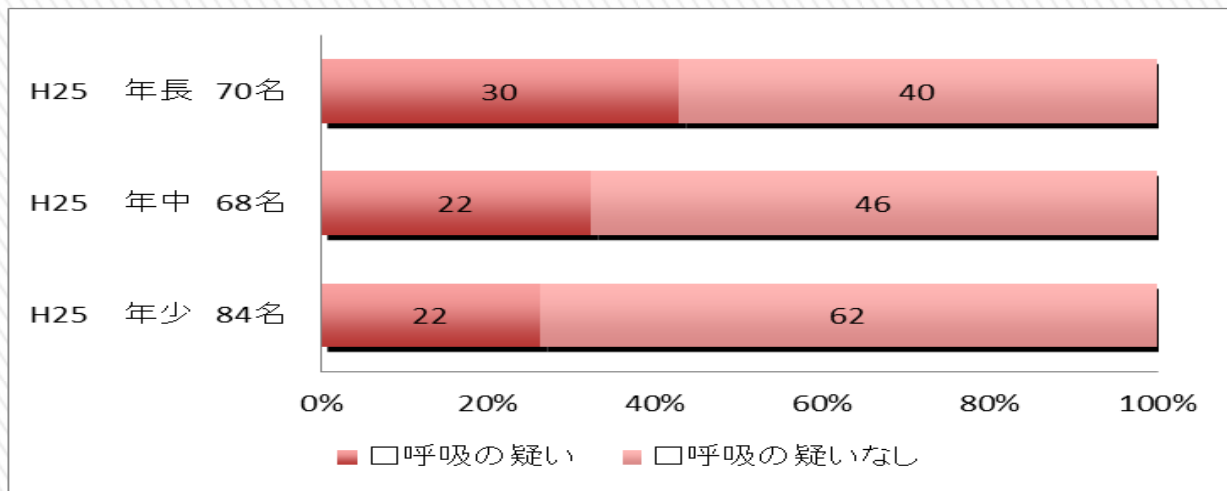
結果 2-①

年度別 学年別口呼吸の割合

平成24年度



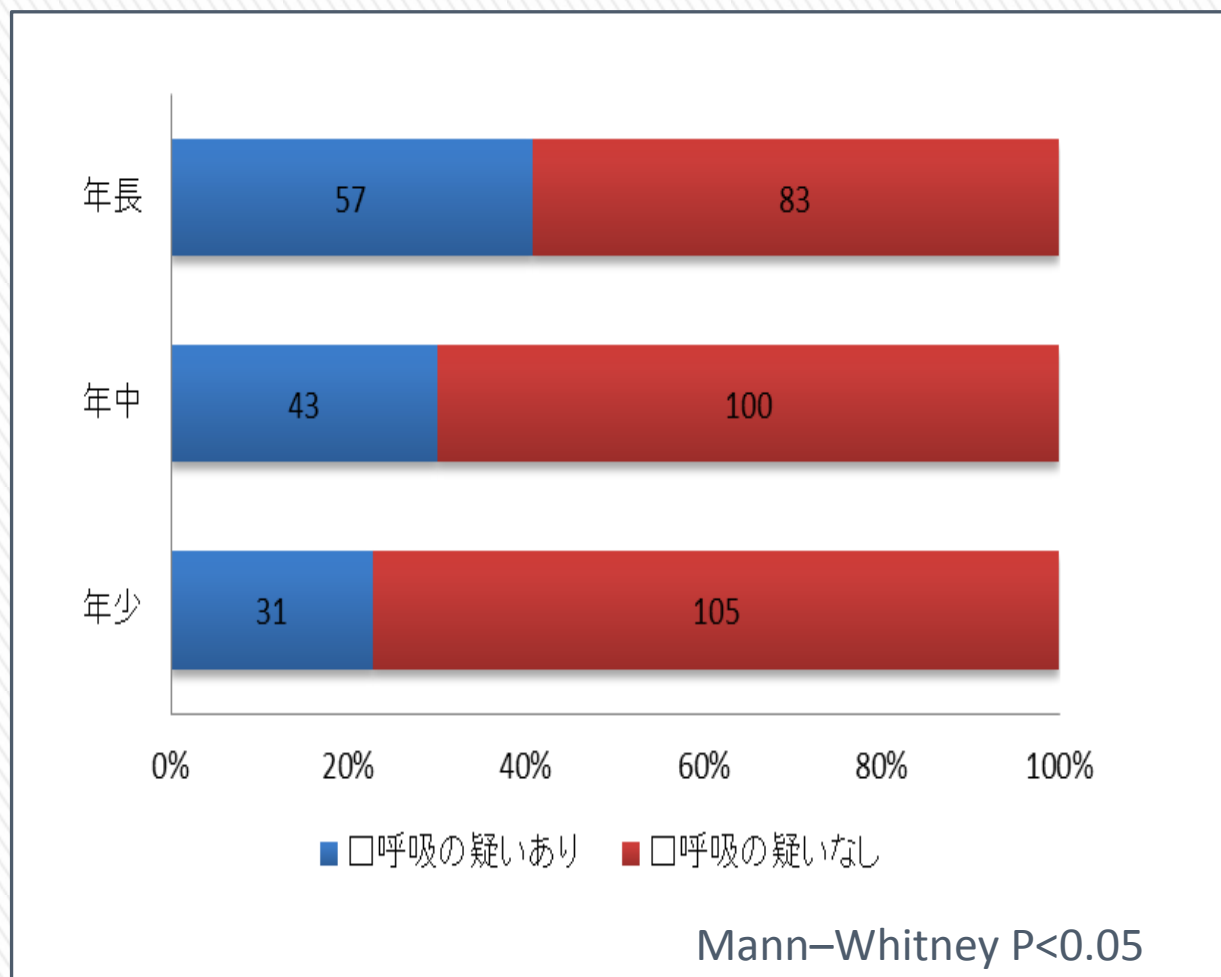
平成25年度





結果 2-②

年度合計 口呼吸の割合





まとめ・考察

- 歯列相談に来院することの多い年長(5歳児)において6割以上に歯列の異常が認められた。
- 各学年とも過蓋咬合の割合が多く,上顎の劣成長が想像される。
- 口呼吸は学年とともに増加していた。

- 年度別で見ると3歳児から4歳児では異常なしが減少し, 過蓋咬合とスペースなしが増加している。4歳児から5歳児では異常なしの割合が増加し,スペースなしと過蓋咬合の割合が減少している。このことより4歳から5歳の間で上顎の成長期が影響しているものと考えられる。
- 口呼吸は,疑いの者の割合は学年が上がるにつれ有意に増加した。そのことから口呼吸の原因は歯列のみならず多要因であり,病態は年齢とともに強調されるといえる。

参考文献:進藤由紀子:小学生における歯列・咬合と口呼吸との関連性について.小児歯誌, 47, 59-72, 2009.

今後も今回の結果を生かし,調査を進めていきたい。